

学生と京都のコミュニティを考える委員会
活動報告書

平成29年4月

一般社団法人 京都経済同友会
学生と京都のコミュニティを考える委員会

目次

委員長あいさつ	1
I. 活動の目的・概要	3
II. 委員会の活動内容	
第1回委員会（オープン委員会）	4
（参考）委員会スタッフと留学生との意見交換・懇親会	7
第2回委員会	8
第3回委員会	11
第4回委員会	14
第5回委員会	17
III. 参加者の声	23
IV. 参加留学生の声	26
＜参考資料1＞ 委員会活動状況	29
＜参考資料2＞ 委員名簿	30

委員長あいさつ

京都は「大学のまち」「学生のまち」と言われ、特有の恵まれた資産を有しています。京都経済同友会においてはこの点に着目し、従来『「大学のまち・京都」を考える特別委員会』におきましては、こうした資産をいかに都市の活性化に結びつけられるか、在京都の企業や大学に役立てられるかについて、活発に議論、検討し活動に繋げてまいりました。平成25～26年度の委員会では、『世界から選ばれる「大学のまち・京都」を目指して ～ 魅力発信に向けた3つの提言 ～』を作成致しました。

実質的に、この『「大学のまち・京都」を考える特別委員会』を引き継いだ『学生と京都のコミュニティを考える委員会』では、平成25～26年度の3提言のうち、2つを引き受ける形で「留学生が来たい、学びたい、働きたいまち・京都」をテーマとし、「産学公民+留学生+日本人学生で広く対話の場」を作っていくことに取り組むことと致しました。そして平成27～28年度京都経済同友会の活動方針を受け、「留学生とともに産学公民オール京都で、京都をイノベーティブなコミュニティとして発展させたい」と委員会活動を展開してまいりました。

この報告書では、上記の思いを体して実施した5回の委員会の内容だけではなく、パネルディスカッションやグループディスカッションに参加していただいた様々な立場の皆さんのご意見、ご感想を記載し、参加型で実施した委員会の雰囲気までも伝えようと工夫してみました。それぞれの委員会の様子を追体験いただけましたら幸いです。

5回の委員会を通じて明らかになったことは、

- ① 留学するにあたって、地元の様々な拠点（またネット上も含め）で京都留学の情報は不足している。
- ② 留学後の住環境はだいぶ整ってきたが、ワンルームやシェアハウスといった個々のニーズへの対応は今後の課題となる。
- ③ 日本型の就職システムはたいへんわかりにくく、また京都は就職できる企業が少なく、東京での就職か地元へ帰ることになりがちである。
- ④ インバウンドビジネスの推進において留学生の存在は貴重であり、リピートの促進や外国人に訴える魅力あるスポット、ツアーストーリーの開発に期待できる。（ex. 京都北部の観光資源）
- ⑤ 明確な目標意識や成果達成力を持っている留学生は、職場運営や事業、経営に明快なロジックを求め、その活用の過程において、企業が社風の革新、成長に向けた良いきっかけ、人材になり得る。

など、多岐にわたりますが多くの気づきを得ることができたと思います。

委員会を通して得られたものは、いくつかあったのではないかとと思いますが、あえて表現しますと、

- ① 参加留学生との協働と学び(ex. 優秀な社会人経験留学生からの刺激、経営者との対話により京都企業への就職を希望する留学生)
- ② 産学公民のネットワーク強化(ex. 共通の連帯感形成により、留学生関連の諸会議の活性化・取り組みの進捗)
- ③ 留学生の活躍する京都の未来像(ex. 人口減少社会～優秀人材の獲得、成長戦略～インバウンド拡大、働き方改革～生産性向上)

ではなかったかと思えます。

委員会では、かつて京都経済同友会として提言をし、実現してきた「京都学生祭典」「グローバル人材開発センター」「留学生スタディ京都ネットワーク」の支援にも力を入れてまいりました。

京都学生祭典はすでに14回実施され、地元の方々の関心も高く、またイベントとしての完成度もずいぶん高くなってきたのではないかと思います。参加学生の成長にも大いに寄与するものであると感じました。

グローバル人材開発センターも毎年参加の学生が増え、PBLの水準もきわめて上がってきています。企業サイドも今後人材の量と質について強化が必要となる中、採用や育成においてセンターの取り組みは今後ますます期待できるものと考えています。

今後とも京都経済同友会の会員の皆様のご支援ご協力をくれぐれもお願いしたいと思います。

最初にも述べましたように、今後ますます京都は「大学のまち」「学生のまち」として発展していくものと思います。経済同友会の皆様、また産学公民の様々な方々、そして留学生、日本人学生の多くのご参加とご支援・ご協力により実り多い委員会活動を担当させていただき、誠にありがとうございました。心から御礼申し上げます。また多大なる事務事項、調整事項に取り組み、委員会にご貢献いただいた事務局の皆さんに感謝申し上げ、2年間の報告とさせていただきます。

平成29年4月

一般社団法人 京都経済同友会
学生と京都のコミュニティを考える委員会
委員長 土山雅之

I. 活動の目的・概要

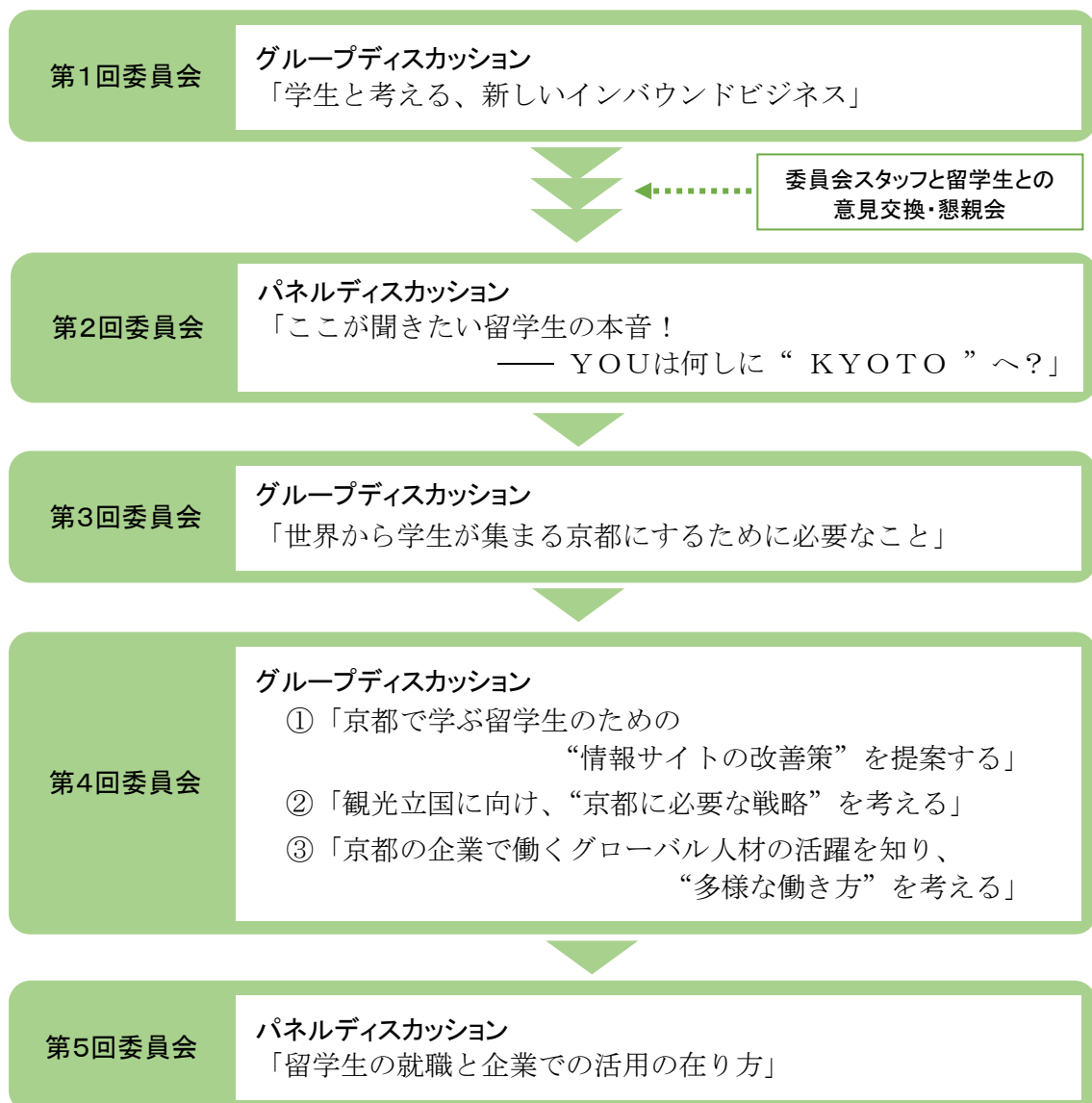
本委員会では、平成24～25年度『「大学のまち・京都」を考える特別委員会』で提言した「対話を通じた多様な人との交流の場の提供」や「留学生が来たい、学びたい、働きたいと思える京都」の実現のための活動を実施。

留学生をテーマに、学生や大学・行政関係者等多様な人が対話し交流する場として、委員会を5回開催した。

第1回、第3回、第4回の委員会は、留学生を含めた多様な人々が参加し、観光や就職等の留学生の関心と京都の問題点をテーマに、グループディスカッションを実施した。

第2回、第5回の委員会は、留学生の現状を知るために、「留学生の視点」と「企業の視点」の2つの視点でパネルディスカッションを実施した。

また、第2回委員会開催前には、委員会スタッフが留学生の現状を知ることがを目的とし、留学生との意見交換・懇親会を実施した。



Ⅱ. 委員会の活動内容

第1回委員会（オープン委員会／グループディスカッション）

「学生と考える、新しいインバウンドビジネス」

前川 佳一氏（京都大学経営管理大学院 特定准教授）

<テーマ説明>

イノベーションとは

一般家庭に電気が通っていなかった時代に、エジソンは、日本の竹を用いて電球を実用化しただけでなく、電球を普及するための送電システムまで考えた。エジソンの発明（イノベーション）が素晴らしいのは、竹を使ったアイデア（1%のひらめき）で終わるのではなく、経済的価値をもたらす仕組みを構築し実現（99%の努力）させたため。

ひらめきやアイデアがあれば、事業は成功すると思われがちだが、その便益を人々に届けるシステムなしでは宝の持ち腐れだ。アイデアを実現するまでやり遂げることで、イノベーションが起こる。

概要

日時: 2015年11月6日(金)

10:00~12:00

場所: 京都東急ホテル

参加人数: 94名

- 参加者のうち留学生は、16名
(参加留学生の出身国)
アメリカ・イラン・韓国・中国
ネパール・フランス・ベナン・UAE
の8ヶ国

インバウンドのおもてなし

2013年の日本のアウトバウンド数は1,747万人（世界で10位程度）、インバウンド数は1,036万人（世界で30位程度）だったが、2015年は、日本のアウトバウンド数とインバウンド数が逆転するといわれている。

おもてなしは、有形・無形の2種類に分けることができる。交通機関・伝統文化・レストラン・観光施設などの物質的なおもてなしは、“有形のおもてなし”。思いやり・心配り・親切等の精神面でのおもてなしは、“無形のおもてなし”。インバウンドが増加する中で、おもてなしは、観光をアピールする重要な要素といわれているが、日本人が考えているのは無形のおもてなしのことが多い。有形・無形のどちらのおもてなしが有効なのかを考えながら、本日のディスカッションを進めていく必要がある。



2 要因理論

2 要因理論とは、アメリカの臨床心理学者ハーズバーグが提唱した「仕事の満足度を高める要因と不満足を引き起こす要因は異なる」という理論。つまり、「会社の方針と合わない」等の不満要因を取り除いても仕事への満足度は得られず、満足するためには、「何かが達成できた」「誰かに承認してもらった」等の“動機づけ要因”が必要である。

この理論をインバウンドにあてはめると、「Wi-Fiが使える」「看板がわかりやすい」ため、京都へ旅行に行こう！とはならない。重要なことは、観光の動機づけ要因（満足要因）を見つける

こと。観光の動機づけ要因について、デービッド・アトキンソン氏は、著書「新・観光立国論」の中で、「気候・文化・自然・食事」が観光立国の4つの条件であり、「気配り・マナー・サービス・治安」は、的はずれな観光アピールであると述べている。

＜グループディスカッション＞

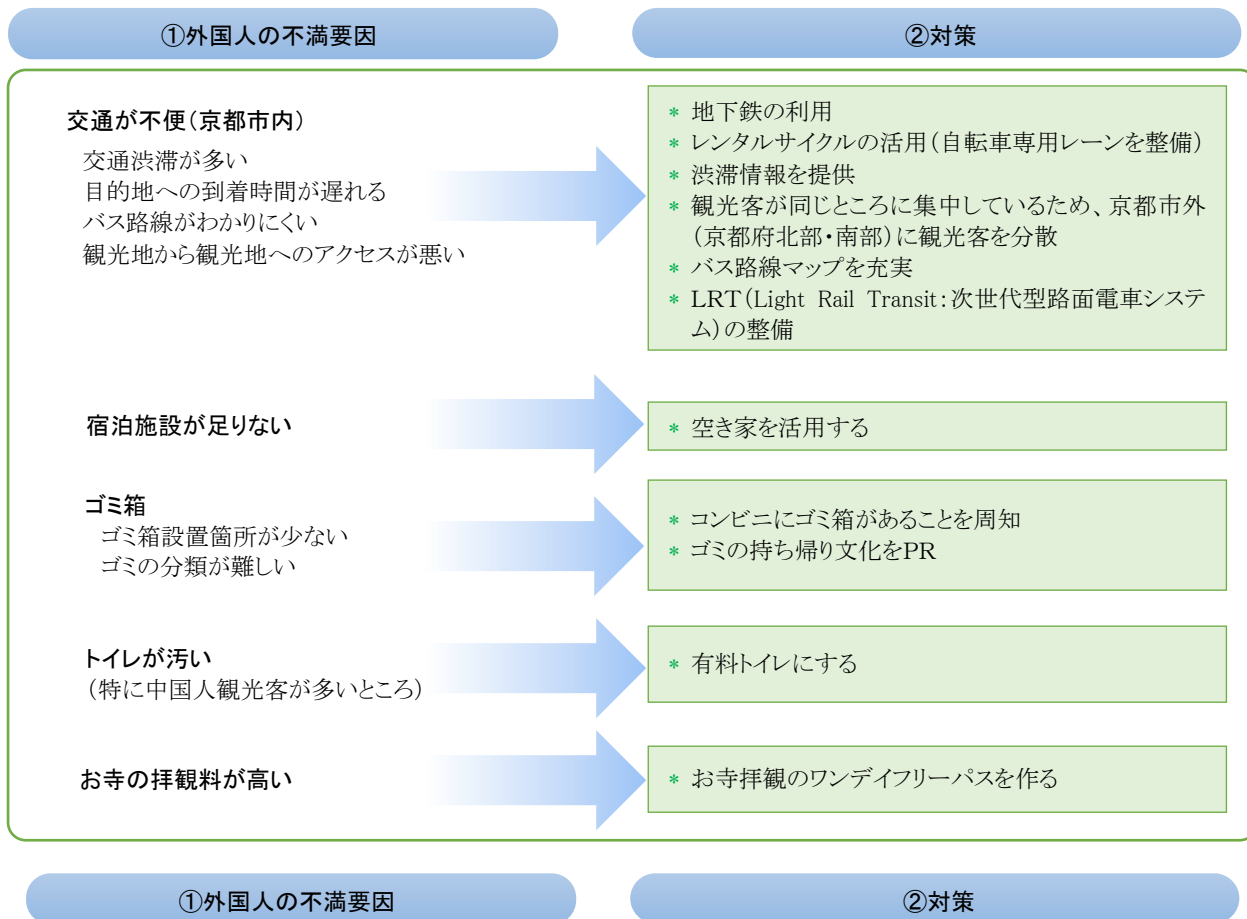
以上の話を踏まえ、以下の4つについて、参加者が14グループに分かれて約45分間のディスカッションを行った。

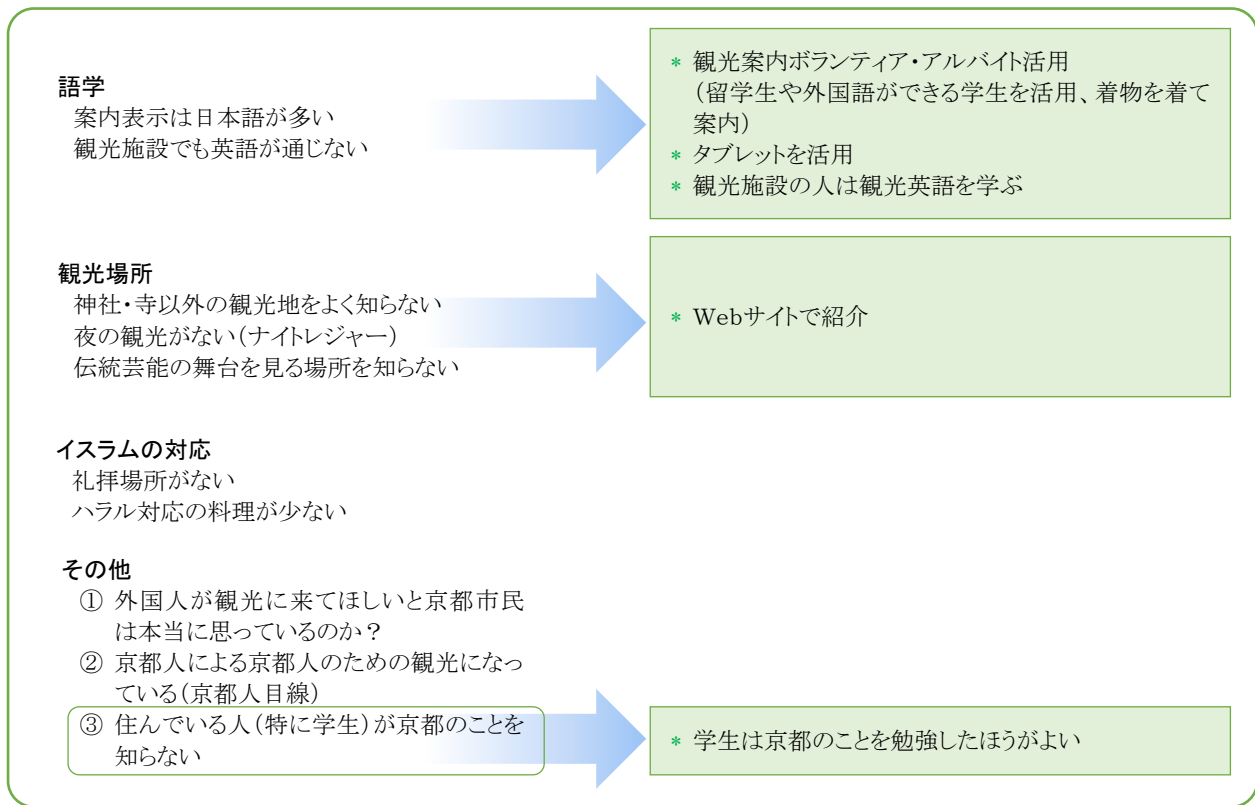
- ① ウチのグループだけが知っている！「外国人の不満要因」
- ② ウチのグループだけが知っている！「外国人の不満要因」への対策
- ③ ウチのグループだからアイデアが出せた！「外国人の満足要因」
- ④ ウチのグループだからアイデアが出せた！「外国人の満足要因」の実現の仕方

ディスカッション後は、6グループが結果を発表。発表した6グループを含めた14グループのディスカッション結果は、次の通り。

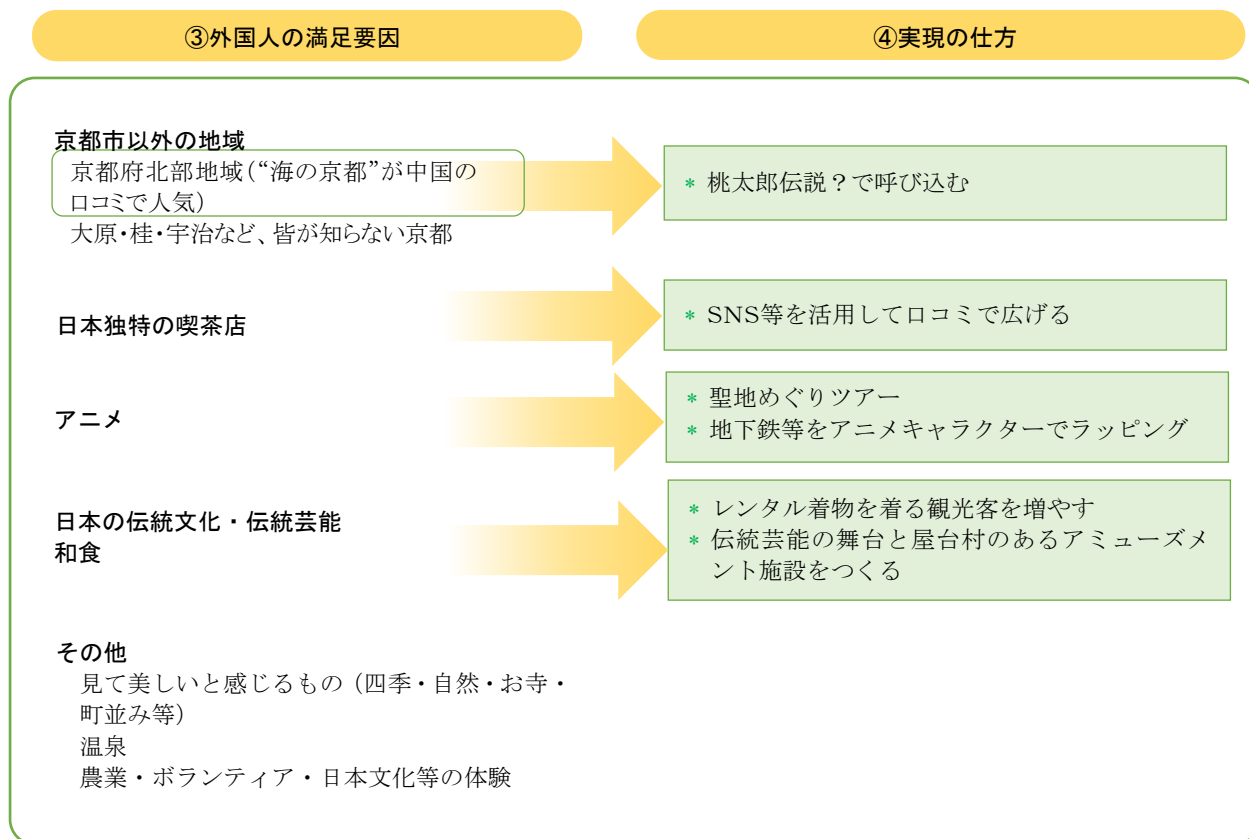


外国人の不満要因とその対策





外国人の満足要因とその実現の仕方



その他の意見

- * 日本人が来てほしいところ、外国人が行きたいところのギャップが大きい。このギャップを埋めることが必要
- * 留学生の不満要因
 - ・ 賃貸住宅が借りにくい
 - ・ 外国人のアルバイト先が少ない
 - ・ 留学生が情報を得るためのSNSやwebが少ない 等

参加者からの一言

前川先生からの「海外から観光に来てもらうためには、観光の満足要因（動機づけ要因）をみつけること」が大事という指摘は、大変示唆に富むものでした。その後、外国人留学生を交えて議論しましたが、彼らが挙げた京都の満足要因には月並みなものが多く、もしそれだけの魅力であれば、京都人気は長く続くのか、少し考えさせられました。一方、外国人留学生の京都生活に対する不満をいろいろと聞くことができたので、参加者にとってとても有意義でした。少人数で議論したため、留学生たちは率直に意見を述べていました。

佐藤 文俊（㈱堀場製作所 常務取締役／本委員会 副委員長）

（参考）委員会スタッフと留学生との意見交換・懇親会

平成27年12月2日（水）、o・mo・ya東洞院において、委員会スタッフと留学生との意見交換・懇親会を開催した。この会合は、今後の委員会活動を進めるにあたり、委員会スタッフが留学生の現状を知ることを目的に実施。

参加留学生は、台湾・中国・イラン・フランス・UAE出身の計7名。留学生からは、自己紹介を兼ね「京都に留学した理由」「留学終了後の進路」等についてお話いただいた。その後、昼食を囲み、留学生生活や日本での就職のこと等、自由に意見交換を行った。



第2回委員会 (パネルディスカッション)

「ここが聞きたい留学生の本音！ — YOUは何しに“KYOTO”へ？」

<登壇者>

パネリスト

- ニコール ベルトツツイ 氏
(アメリカ・シカゴ大学 3回生/アメリカ出身)
- 林 均蔚 (リン キンウェイ) 氏
(同志社大学 3回生/台湾出身)
- 山下 美早貴 氏 (京都府立大学 4回生/日本出身)
- ラウフ・ファード モハマト マーディ 氏
(京都大学大学院 博士後期課程 1回生/イラン出身)
- マイケル ライアン スミス 氏
(京都大学大学院 博士後期課程 2回生/アメリカ出身)

コーディネーター

- 杉岡 秀紀 氏 (京都府立大学公共政策学部 講師/
本委員会 アドバイザー)

概要

日時: 2016年2月19日(金)

16:00~18:00

場所: 京都東急ホテル

参加人数: 36名

- オブザーバーとして、
留学生が1名参加
- 王 月璋 氏
(アメリカ・プリンマー大学3回生
/中国出身)

<パネルディスカッション内容>

自己紹介・日本に留学した理由

リン: 大学では、ビジネスコミュニケーションを学んでおり、授業は全て英語。祖父の貿易会社が30年以上日本と取引しており、日本とは幼い時から馴染みがあった。さらに、親の勧めもあり、日本の大学へ留学を決めた。

マーディ: 大学院で鉄筋コンクリート造の耐火性能について研究している。高校生時代、将来の仕事を選ぶ際に母国を守るために戦闘機のパイロットになりたいと父に相談したが、世界の平和を守る仕事をするよう助言され、土木系のエンジニアになることに決めた。学部時代、イラン人の教授のチームに日本人の研究者が何人か所属していたこともあり、大学を卒業した後、日本の優れた耐震設計などを勉強するため、日本の大学へ留学を決めた。

ニコール: 京都アメリカ大学コンソーシアムの1年間のプログラムで、アメリカから京都に短期留学している。高校生の時に奈良県に留学したことがきっかけで、日本についてもっと勉強したいと思うようになった。

マイケル: 日本企業と関係がある仕事をしていた祖父から、子供の頃に日本のお土産を貰ったり、話を聞いたりしていたので、昔から日本には興味があった。しかし、田舎に住んでいたために、周りに日本人がおらず、日本語を学ぶ機会がなかった。18歳の時に日本(滋賀県)に留学、さらに大学2年生の時に京都の龍谷大学に留学した。大学卒業後は、ALT(外国語指導助手)として和歌山県的那智勝浦に派遣され英語講師として働いていた時、東日本大震災が起こり、東北でボランティア活動をした。同時期、那智勝浦でも台風による災害が起こり、教え子や同僚が被害にあった。この経験を通し、今後の日本に役に立ちたいと思い、現在京都大学で研究している。

山下：京都学生祭典の“よさこいサークル”に所属していた時に留学生と関わり、自分の語学力が足りないことを知ったため、留学を決めた。留学は、大学の3回生終了後に1年間休学、アメリカ(シアトル)のベルビューカレッジ大学の留学プログラムに参加した。

王(オブザーバー参加)：中国からアメリカの大学に留学しており、現在はニコールさんと同じ京都アメリカ大学コンソーシアムの短期留学のプログラムで京都に短期留学している。小学校の授業で源氏物語を学んだことから、日本に興味を持った。

留学生活で困っていること

マイケル：日本人と同じような生活をしているが、「いつまで外国人なのか？」と悩んでいる。大学院の博士課程を終えたら、日本に住み、大学の教員になりたいと考えている。国籍を変えられなくても、日本の永住権を取りたいと思っている。

ニコール：アメリカ人は自分の意見をはっきりと言うが、京都の人は言っていることと本音が違うことに驚いた。



マーディ：日本では、2つの国籍は持てないので、将来どうすべきかを悩んでいる。京都は神社やお寺、着物等の伝統的なものが多くあり、いずれは京都の美しさを伝えるような仕事がしたいと思っている。さらに私の出身のシーラーズは日本の京都のような都市なので、シーラーズ市と京都市を何らかの方法で繋げたいと考えている。

リン：現在就職活動中。周りから就職は東京に行く方が良いと言われているため、東京での就職活動を意識しているが、それで良いのか迷っている。

山下：アメリカに留学していた時、よく日本語で話しかけられた。英語を学ぶために留学しているので、英語で話しかけてほしいと思った。

ニコール：観光客として京都に来る人は、観光のためだが、留学生として来る人は、一所懸命日本語の文学や言葉を理解しようとしている。京都に住んで困ることは、山下さんの意見と同じく、日本人に英語で話しかけられること。

京都に留学生を増やすために何が必要か？

マーディ：イランには、日本に関係する学校や国際交流センター等がなく、また日本の本や資料が欲しくても、取り寄せる以外方法はなかった。日本の大学や学校が国際交流センター等を現地に作れば、日本への留学生が増えると思う。そうしないと、他国への留学申請手続きのほうの方が簡単のため、留学生は他国に留学する。

マイケル：故郷では、周りに日本人がいなかったため、日本語の勉強開始が遅れてしまった。マーディさんの意見のように、コミュニティレベルで交流センター等があればよかった。一般的なアメリカ人は、日本のことを詳しくは知らない。しかし、一度日本に来たら、日本への留学を考えるとと思う。観光などで来日する等、若い人に日本を知ってもらう機会をつくることを考えるべき。

マーディ：留学生の誘致は、日本大使館よりも、日本の大学や企業などの民間レベルで実施する方が良い。例えばトヨタや日産のような大手の車メーカーは、イランにたくさんのディーラーが

あり、日本のアカデミア（大学のような研究機関）などの案内を、より効果的にできている。とりあえず、政府の負担を減らさないといけない。

リン：観光客や留学生などの来日する外国人は多い。ただ留学しても、日本での就職活動はとても大変なため、就職を諦めて母国に帰ってしまう留学生は多い。留学生は日本学生と比べて日本語は堪能でなく、書くことも苦手。エントリーシートで落とされたら、くじけそうな気持ちになる。

将来の夢など

ニコール：日本の伝統について、大学院で研究したい。

マイケル：家族を持ち、京都に住みたいと思う。日本の伝統や良さを、たくさんの外国人にきちんと伝えられるようになりたい。

マーディ：以前イランと日本は友好的な関係だったが、様々な問題により両国の関係は薄くなってしまった。今後は、イランと日本の発展の支えになっていきたい。

リン：単に会社に入って仕事をするだけでなく、管理職になって責任ある仕事をしたい。日本で外国人が管理職になるのは難しいと思うが、グローバル人材・ブリッジ人材として日本に貢献したいと思う。

王（オブザーバー）：日本が好きなので住みたいと思うが、日本で働くことは難しいと思う。日本で働く場合、女性で外国人というのは不利になる。欧米の方が、キャリアアップの機会や研究する環境があるように思う。女性がもっと活躍できるような社会になってほしい。

山下：留学すると、就職の際に少し不利なる。新卒一括採用ではなく、通年採用する企業が増えれば良いと思う。

参加者からの一言

第2回委員会のコーディネーターを務めさせていただきました。パネリストはアメリカ、イラン、台湾からの留学生と、留学経験のある日本人という構成で非常にグローバルかつ多様に富む議論ができました。その中でも印象に残っていることは2点あります。1点は家族や学校の授業などかなり身近なきっかけで日本への留学を決めていることです（最近アニメがきっかけの留学生も増えているとか）。2点目は留学生にとってはまだまだ日本の就職のハードルが高いということです。これからもこういう本音ベースで語り合い、そして課題解決へと繋げるための「対話コミュニティづくり」が重要だと思います。

杉岡 秀紀（福知山公立大学地域経営学部 准教授* / 本委員会 アドバイザー）

※所属・役職名は、平成29年3月31日のもの

第3回委員会（グループディスカッション）

「世界から学生が集まる京都にするために必要なこと」

杉岡 秀紀 氏（京都府立大学公共政策学部 講師／本委員会 アドバイザー）

<留学生の現状説明>

日本で学んでいる留学生数は18.4万人。そのうちの約9割がアジア出身者。人数の多い出身国の順番は、中国、ベトナム、韓国、ネパール。特に、ベトナムやネパールからの留学生が増えてきている。京都市内では、年々留学生が増加傾向であり、平成26年で7,470人。在籍大学は、京都大学、同志社大学、立命館大学で全体の6割を占めている。出身国別では、中国・韓国の留学生が多い（表3参照）。

政府は1983年に「留学生10万人計画」を計画。さらに、2020年までに30万人まで留学生を増やす「留学生30万人計画」を2008年に打ち出した。一方、アジア各国では、自国を「内外の学生が質の高い教育に惹かれて集積する教育の中核拠点」とすることを宣言している。特に、シンガポールでは、著名な先生を誘致したり、教員を増やしたり、手厚い奨学金給付などを充実。その結果、世界大学ランキングにおいて、27位の京都大学を抜き、シンガポール国立大学は26位。

概要

日時：2016年5月24日(火)

16:00～18:00

場所：京都東急ホテル

参加人数：58名

参加者のうち留学生は、9名
（参加留学生の出身国）
アメリカ、イラン、韓国、中国、
台湾、ネパール、フランス
の7ヶ国

表3 杉岡氏資料より

京都府の留学生の状況					
(1)大学別内訳	大学名	平成25年度	構成比	平成26年度	構成比
	京都大学	1,684	23.8%	1,725	23.8%
	立命館大学	1,418	20.1%	1,440	19.9%
	同志社大学	1,187	16.8%	1,273	17.6%
	龍谷大学	550	7.8%	510	7.1%
	京都情報大学院大学	428	6.0%	446	6.2%
	京都学園大学	153	2.2%	247	3.4%
	京都精華大学	216	3.1%	245	3.4%
	京都産業大学	208	2.9%	198	2.7%
	京都造形芸術大学	223	3.1%	196	2.7%
	京都工芸繊維大学	203	2.9%	189	2.6%
	その他	801	11.3%	769	10.6%
	合計	7,071	100.0%	7,238	100.0%
(2)出身国別内訳	国・地域	平成25年度	構成比	平成26年度	構成比
	アジア	6,042	85.5%	6,228	86.0%
	うち中国	3,765	53.2%	3,930	54.3%
	うち韓国	1,260	17.8%	1,231	17.0%
	中東	78	1.1%	88	1.2%
	アフリカ	73	1.0%	83	1.2%
	大洋州	56	0.8%	54	0.7%
	北米	262	3.7%	225	3.1%
	中南米	78	1.1%	77	1.1%
	欧州(NIS諸国含む)	482	6.8%	483	6.7%
	合計	7,071	100.0%	7,238	100.0%

※ NIS諸国とは、旧ソ連のロシア、ウクライナなど12カ国。

「京都地域留学生交流推進協議会 調査」より

<グループディスカッション>

以上の話を踏まえ、参加者が8グループに分かれて「世界から学生が集まる京都にするために必要なこと」について、約60分間ディスカッションを行った。ディスカッション後は、各グループが結果を発表。



グループの発表内容は、次の通り。

奨学金制度「1%クラブ」

京都企業が留学生歓迎のスローガンをだし、企業の利益の1%を留学生奨学金制度に提供する「1%クラブ」を作る

就職支援

企業のトップと留学生が交流できる場を定期的に設定し、情報交換をする。最終的には、就職に繋がれば良い

京都の魅力を発信

- * 留学生が、SNSで京都の魅力を発信
- * 現地(海外)に京都PR拠点をつくる
- * 日常生活、ホームステイ等の体験を発信

留学生へのサポート

来日前・来日後のサポートを充実

京都の企業を知る

留学生が京都企業を知る機会を増やす

その他

奨学金はとても大切だが、奨学金だけの理由で日本に行こうとは思わない

ギャップをうめる

ギャップ① 留学生を呼びたい「行政」
VS
留学生に苦手意識がある「京都市民」

↓
留学生、外国人住民や地域住民との交流の機会を多くする

ギャップ② なんとなく大学に行く「日本人学生」
VS
学ぶために大学に行く「留学生」

↓
お互いに理解し合えるよう交流の機会を大学がつくる

住環境の整備

- * 大学・行政・京都の民間企業が協同出資して学生寮を建てる
- * 空き家・空き公団等をリノベーションして、留学生用のシェアハウスを建てる

地域コミュニティとの交流

地域での世話役の人などを通じ、留学生が地域と交流

就職できる環境の整備

- * 京都の企業情報を充実
- * アルバイトやインターンシップ求人情報を充実

大学生になる前に京都に来る

- * 海外の高校生の短期留学
- * 海外の小中学校の修学旅行
- * 観光で京都の良さを体験(京都の生活・伝統文化・自然・サブカルチャー等)

情報の発信

- * どのような学生を集めるかを明確にする
- * 留学生にとって必要な情報やメリットを発信
- * 情報発信は留学生の意見を参考にする
- * 留学生からのSNSで発信

観光コンテンツとして京都の大学を見学

観光のパフレットに掲載する

事前予約すれば、

- * 観光客が模擬授業を受けることができる
- * (修学旅行生のように) 学生がキャンパス案内をしてくれる

住宅設備の充実

企業の社宅として、新入社員と留学生のシェアハウスをつくる。そのメリットは、

- * 留学生が日本文化・企業を学べる
- * 新入社員は英語を学べる
- * 将来的に留学生の就職・採用に繋がれば、なお良い

情報発信

日本の大学はあまり知られていないため、現地の大学への情報提供する

生活しやすい環境づくり

手続きや契約等(銀行口座、携帯等)のサポート

日本人との交流

茶道など伝統文化を体験しながら日本人と交流する場が必要

参加者からの一言

第3回委員会では初めに杉岡先生の説明があったおかげで、私自身も論理的に全体を把握しディスカッションに参加することができました。特に留学生の出身国の偏りは今後、留学生の日本での就職を企業の立場として考えたら大きな課題になると思います。

その後の討議ではグループディスカッションの形式をとったおかげで、参加者全員から活発な意見が出て、特に留学生の意見は今まで当たり前だと思って気が付かなかったようなところも多く、たいへん貴重だったと思います。そういった意味でも、今あるギャップ(日本人と外国人、企業と学生)を埋める為にはこの委員会には留学生の参加は絶対に必須だと思います。

今後留学生が参加したくなる会議にするためにもキッチリとアウトプットも出していく必要があると感じました。

児嶋 一登 (株京写 代表取締役社長／本委員会 担当幹事)

第4回委員会（グループディスカッション）

テーマ1「京都で学ぶ留学生のための“情報サイトの改善策”を提案する」

テーマ2「観光立国に向け、“京都に必要な戦略”を考える」

テーマ3「京都の企業で働くグローバル人材の活躍を知り、“多様な働き方”を考える」

ディスカッションの方法

上記の3つのテーマについて、参加者が6グループに分かれ、約90分間ディスカッションを行った。

テーマ1、テーマ2のグループでは、まず進行担当がテーマの説明をし、その後議論を行った。テーマ3のグループでは、ゲストスピーカーとして参加いただいた京都の企業で働いている外国人社員の方より、「日本で就職した理由」「仕事で満足している点」「外国人が働く上での課題」等についてお話しいただき、その内容をもとに議論を行った。

進行担当・スピーカー

テーマ1 [進行] 西松 卓哉 氏

((公財)大学コンソーシアム京都 副事務局長)

テーマ2 [進行] 東 宗謙 氏 (㈱太鼓センター 代表取締役社長/本委員会 担当幹事)

[進行] 豊田 博一 ((一社)京都経済同友会 理事事務局長)

テーマ3 [進行] 佐藤 文俊 氏 (㈱堀場製作所 常務取締役/本委員会 副委員長)

[ゲストスピーカー] カマイ パリンヤ 氏 (生田産機工業㈱)

朴 蓮 氏 (㈱フラットエージェンシー)

[進行] 塚腰 高秀 氏 (㈱塚腰運送 代表取締役副社長/本委員会 担当幹事)

[ゲストスピーカー] 周 妙鳳 氏 (堀場製作所 海外リージョンチーム マネジャー)

劉 泓子 氏 (㈱松栄堂)

[進行] 中川 亮平 氏 (京都外国語大学 准教授)

[ゲストスピーカー] スアンチャンノン アシラヤー 氏 (㈱JTB西日本)

仇 暁敏子 氏 (㈱フラットエージェンシー)

概要

日時:2016年9月30日(金)

17:00~19:00

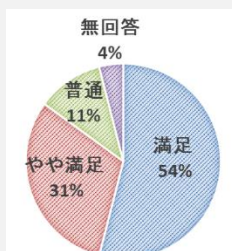
場所:リーガロイヤルホテル京都

参加人数:73名

参加者のうち留学生は、22名
(参加留学生の出身国)
アメリカ・イタリア・イラン・
インドネシア・韓国・タイ・台湾・
中国・ネパール・フランス・
ロシア・モンゴル

の12ヶ国

(参考) 参加者アンケート結果 N=52 (回答率 71%)

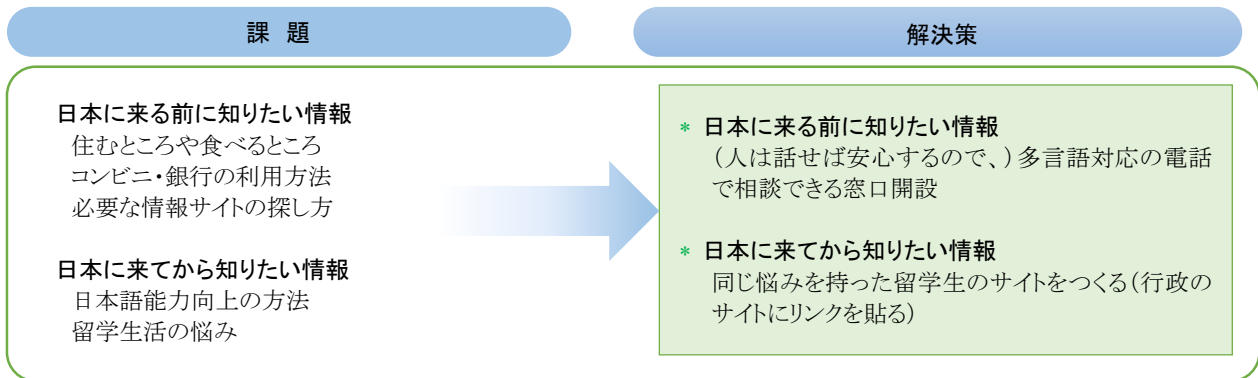


参加者の85%が、満足・やや満足と回答。委員からは「留学生視点で率直な意見を聞くことができた」等の意見が多かった。

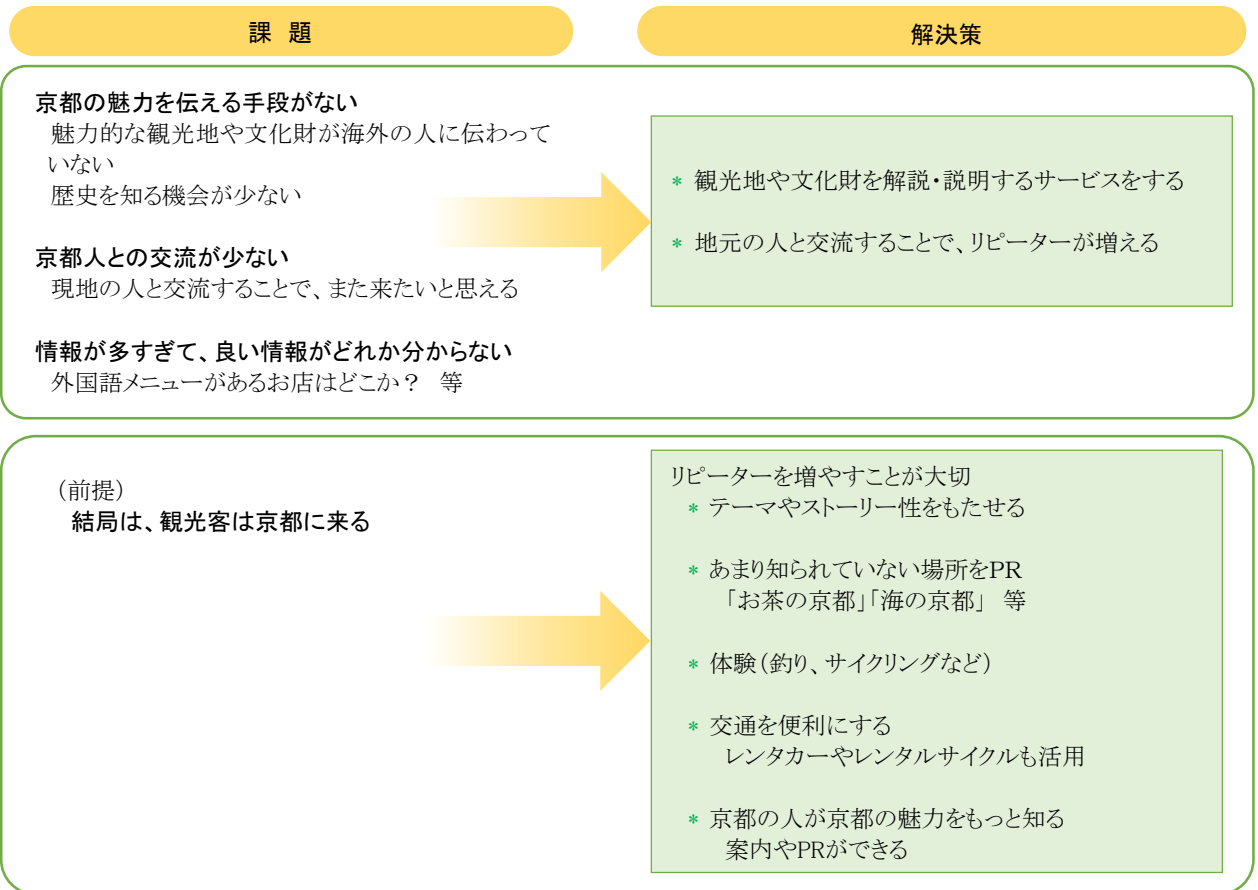
一方、「時間が短く、解決策までたどりつかない」「オープンスペースなので、声が聞こえにくい」「人数が多いと、議論に参加できない人がいる」等の課題も指摘された。

ディスカッション結果

テーマ1 「京都で学ぶ留学生のための“情報サイトの改善策”を提案する」



テーマ2 「観光立国に向け、“京都に必要な戦略”を考える」



テーマ3 「京都の企業で働くグローバル人材の活躍を知り、“多様な働き方”を考える」

外国人が日本で働く場合の課題 生き生きと働くための提案・解決策

就職する過程での障壁

- ① 新卒一括採用
- ② 就職活動に時間がかかる(何回も面接)
- ③ 就職用の書類作成が困難
- ④ 職種によって就労ビザがおりない(専攻以外の業種に就職する場合)

働くうえで障壁

- ① 言葉(敬語、専門用語、漢字等)
- ② 和を重んじるコミュニケーション
- ③ 礼儀正しい行動をすること
- ④ 地域による文化の違い

→

- * 日本人と交流しながら、面白いことを探す
- * 目的を設定し達成感を得る
- * やりがいを感じながら、仕事をする
- * 諦めず、怖がらず、叱られてもチャレンジ
- * 自分のキャリアをつくっていく

就職する上での障壁

積極的な外国人採用の企業が少ない
昇進は実力主義ではない

就職した後の障壁

日本語が難しい
日本の礼儀や常識を理解するのに時間がかかる

→

- * 京都経済同友会と大学が連携して就職支援をする(インターンシップ等)
- * 外国人留学生を日本企業は、積極的に採用する(留学生は、ハングリー精神があり、外国語もできる)

言語の壁

言葉による誤解が心配

文化・考え方の違い

出勤の時間(何分前に出社するのか?)
自分の意見をはっきり言いにくい
有給が取りにくい

→

- * **言葉の壁**
勉強する、積極的に人と話す等で解決(日本語は母語ではないことは理解してほしい)
- * **文化・考え方の違い**
皆がお互いに自分の意見や考えを伝え合わないといけない

参加者からの一言

留学生と企業経営者とのディスカッションは、自由な発想の中、様々な視点からのコメントがあり、非常に面白いものでした。

私は、テーマ2の“京都の観光戦略”に参加しましたが、「観光客のリピーターを増やすためにはどうすればよいか？」という問いに対し、ある留学生は、「京都では、ホームステイ等の地元の人たちと直接深く交流する機会が少な過ぎます。地元の人たちと深く交流できれば、一番リピーターが増えます。」と発言しました。この発言は、私の心に深く刺さりました。仕事では、年間8千人以上の観光客にインバウンドの太鼓体験をしています。リピーターになっていただくために、どれだけ深く交流しているか？見つめ直してみたいと思ったものでした。

東 宗謙 (株太鼓センター 代表取締役社長／本委員会 担当幹事)

第5回委員会 (パネルディスカッション) 「留学生の就職と企業での活用の在り方」

<登壇者>

パネリスト

佐々木 幸太郎 氏 (㈱デアライブ 取締役COO)

田中 陽一 氏 (京都エレベータ㈱ 代表取締役)

山本 桂一郎 氏 (㈱ナジック・アイ・サポート

西日本統括本部本部長)

コーディネーター

堀江 未来 氏 (立命館大学国際教育推進機構 准教授)

概要

日時: 2016年12月20日(火)

10:00~12:00

場所: 京都東急ホテル

参加人数: 33名

<パネルディスカッション>

留学生の状況説明

堀江: 日本の留学生受け入れ政策は、1983年の「留学生10万人計画」から始まった。この政策は、当時1万人程しかいなかった留学生を2000年までに10万人に増やす計画で、2003年には達成。しかし、日本で学んだ後に帰国することが趣旨であり、留学生を人材として日本社会に定着させる政策ではなかった。2008年からは「留学生30万人計画 (2020年までに留学生を30万人にする政策)」が始まった。10万人計画とは異なり、日本の大学の国際競争力を高めるため、優れた留学生を獲得し、日本国内での就職を支援し日本社会の活性化に繋げることが謳われている。



留学生数に関しては、「30万人計画」が始まった2008年の約12万人から、2015年では約21万人と急速に伸びている (図5)。京都府内での留学生は、2015年で7,398人であり、留学生のほとんどは京都大学・立命館大学・同志社大学に在籍している。

就職に関しては、日本で就職希望の留学生約2万5千人 (2014年) のうち、半数の約1万2千人が日本で就職をしており、彼らの出身国の上位5ヶ国が中国、韓国、ベトナム、台湾、ネパールである。

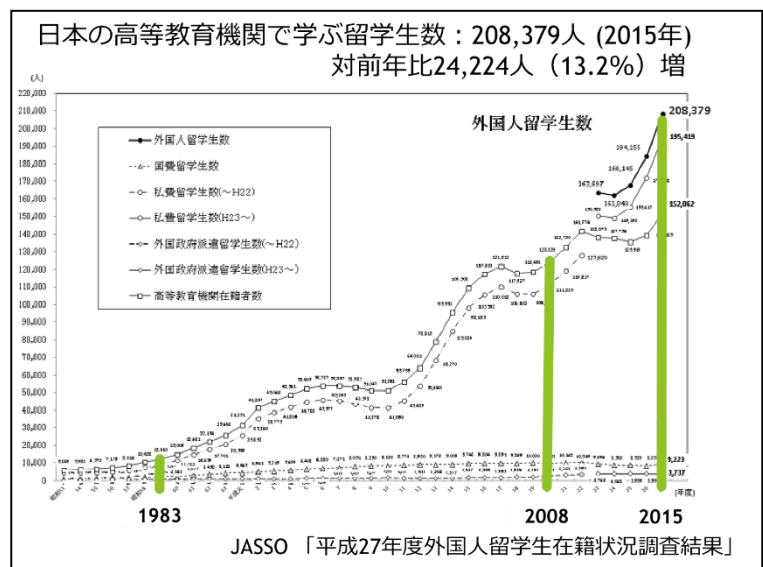


図5 堀江氏資料より

パネリスト自己紹介

山本：留学生スタディ京都ネットワークで有給インターンシップを運営しており、2015年は15社の企業に22名の留学生が参加した。参加留学生の半分は中国人で、約2割が韓国人。

就職に関しては、留学生の希望と日本企業のニーズにギャップがある。グローバルに展開している会社（大企業）に就職を希望する留学生は多いが、実際には希望者の約2割しか就職できていない。仕事内容では、国際業務や貿易などの仕事を希望する留学生は多いが、それらの業務で採用される留学生は約3割。その他は日本人と変わらない仕事に就いている。（表5-1）

表5-1 山本氏資料より

職務内容別許可人数		
職務内容	許可人員	(構成比)
翻訳・通訳	2,773	23.8%
販売・営業	2,743	23.6%
情報処理	949	8.1%
教育	854	7.3%
海外業務	604	5.2%
技術開発	543	4.7%
経営・管理業務	489	4.2%
設計	474	4.1%
貿易業務	317	2.7%
会計業務	260	2.2%
調査研究	169	1.5%
医療	90	0.8%
国際金融	82	0.7%
広報・宣伝	78	0.7%
その他	1,222	10.5%
合計	11,647	100.0%

注：32.4%は「海外業務」と「貿易業務」の合計値を示している。

法務省入国管理局「平成25年における留学生の日本企業等への就職状況について」より

田中：ナジック・アイ・サポートの有償インターンシップで、3年前に留学生（中国人）を採用。その留学生の紹介で中国からさらに1名採用した。彼らは、事業開発や海外進出の分野で活躍している。

佐々木：弊社は、海外向けのWebサイトの製作会社で、今年度で6期目。文部科学省のJETプログラム¹でALT（外国語指導助手）をしていたアメリカ人1名を、今年4月に採用した。

“留学生の希望”と“日本企業のニーズ”のギャップ

山本：日本にいる留学生の半分以上は中国人。企業からは、ASEANの留学生を採用したいというニーズがある。一方、インバウンド客が（特に中国から）急激に増加し、文系留学生の就職先として、インバウンド関連のサービス業からの求人が増えてきた。例えば、道頓堀の“かに道楽”や“ミキハウス銀座店”などは8割がインバウンド客だといわれ、国内にいながらも外国人対応をせざるを得ない状況になっている。留学生採用は、海外進出のための採用から、インバウンド客の対応のための採用と、ニーズが変わってきている。

田中：外国人を採用した最初のギャップは、成果を出すための“努力”や仕事の“スピードの速さ”だった。その一方、協調性や「全てを言わなくてもわかるだろう」という日本的な考え方の会社風土の中で、自己主張をし、やりたいことはするが、言われなければ何も関心を示さない外国人社員に対し、「なんてわがままな社員だ」と思っていた。しかし、一緒に働いていくうちに、成果を認めてもらうためにはどうすれば良いかを着実に実践しているということがわかった。成果を出すための仕事の仕方は素晴らしい。これは自分たちが学んでこなかったことだと、留学生を採用して気付いた。

佐々木：翻訳で採用したいと考えていたが、留学生はWebマーケティングのキャリアを積みたいとの明確な希望があった。また、JETプログラム経験者なので日本文化をよく理解しており、仕事への意欲が高いため、日本の仕事の仕方に順応するのも早い。ただ、外国人には、指示等

¹ JETプログラムとは、語学指導等を行う外国青年招致事業（The Japan Exchange and Teaching Programme）の略で、外国青年を招致して地方自治体等で任用し、外国語教育の充実と地域の国際交流の推進を図る事業。

をはっきりと伝えないと理解できない部分がある。

山本：日本人にとっては当たり前で、言わなくてもわかる以心伝心の内容が、留学生には伝わらない。留学生は説明すれば理解できるので、きちんと説明する必要がある。

田中：現場での下積みを、外国人社員は「別の人の仕事で、自分はマネジメント」と考え、現場での下積みの仕事をしない。しかし、その下積みが仕事の上で重要だということを伝えれば、理解しきちんと仕事をする。



留学生を雇用した場合の負担

田中：現場の教育担当者は、「外国人社員に、なぜこんなことまで指示しないといけないのか？」と感じていると思う。しかし、最近の日本学生が、言わなくてもわかるのかと言われると疑問。その中で、きちんと伝える社員教育のシステムや社内風

土を構築することが大事であり、企業の強みも増すではないかと思っている。

山本：留学生は、時間や締切りを守ることが苦手。この違いを理解することが必要。文化や考え方が異なるだけで、理解力が悪いのではない。

佐々木：一つ一つ伝えないといけないが、他の日本人の社員のコミュニケーション力が上がる大きな成長の機会だと思っている。

留学生を雇用するメリット

山本：留学生を採用せざるを得ない状況になっていると思う。18歳人口の推移をみると、1992年の205万人に比べ、2015年は120万人、2031年は99万人で人口が減ることは確実。(表5-2) 仮に優秀な人材が全体の1割と仮定すると、1992年は20万5千人であり、2015年は12万人。最近の学生は昔に比べると優秀でないといわれるが、人口が減っているからであり、人気のある大手企業は昔も今も採用レベルは

変わらない。大卒を採用して終身雇用する従来の企業組織運営は成り立たなくなっており、外国人を採用することは必然となってきている。

田中：京都・滋賀・大阪向けに事業をしていたので必要を感じなかったが、留学生を採用してから自社の海外進出を考えるようになり、もう一人外国人社員を採用できた。異なる考え方を取り入れることは、企業が成長できるチャンスだと思う。

佐々木：異なる文化が入ることによって、仕事の仕方に工夫が必要となり、良い方向に変わった。また会議の場で、鋭い質問をするのは外国人社員だったりするので、異なる文化が入るのはメリットだと思う。

表5-2 山本氏資料より

18歳人口の比較				
18歳年度	1979年	1992年	2015年	2031年
18歳人口	156万人	205万人	120万人	99万人
現在年齢	55歳	42歳	19歳	3歳
大学入学者数	41万人	54万人	62万人	62万人(仮)
大学進学率	26.3%	26.3%	51.7%	62.6%(仮)
18歳人口上位10%	15.6万人	20.5万人	12万人	9.9万人
大学生に占める割合	38.0%	38.0%	19.4%	16.0%
“優秀な”大学生	4割	4割	5人に1人	6人に1人

文部科学省「学校基本統計」より
ただし、2031年は、国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口
(出生中位・死亡中位)を基に作成

【フロアからの質問】

1. 京都は他府県に比べ、留学生が少ないのか？京都の大学では、今後留学生が増えていくのか？

堀江：留学生は関東が圧倒的に多い。特に中国・韓国からは、東京に留学したいと考える人が多い。立命館大学では、文部科学省のスーパーグローバル大学創生支援事業で留学生を2023年までに、1,587人から4,500人に増やすと掲げており、京都大学・同志社大学でも同様の事業で増やそうとしている。しかし、学部課程（4年間）は定員があり、留学生だけを増やすのは難しいため、短期留学生を増やそうと考えている。

2. 大学には英語だけで受講できるコースがあり、そこで学んでいる留学生は寮と大学を往復するだけで、日本の社会に馴染んでいない場合があると聞く。留学生を大幅に増やすと、日本語のできない学生が増え、問題ではないのか？

堀江：“グローバル30”の事業において、英語による授業だけで学位が取得できるコースが創設された。日本語能力を入学要件としていないため、日本語での生活を始める上で様々なハードルがある。立命館大学では、こういったコースにおいても日本語の必修授業があり、卒業までには一定レベルで日本語ができるようになっている。しかし、英語を母語としない学生にとって、英語で授業を受け、日本語も学ぶことは、かなりの負担。これに耐えうる学生は目覚ましい成長をするが、耐えられない学生に対しては、大学でサポートする必要がある。今後も英語だけで受講できるコースの流れはなくなることはない。

3. 留学生は、特定の都市の大学だけで増やすのが良いのか、全体として増やすのが良いのか？

堀江：様々な大学に留学生がいることは、日本人学生や教員に良い刺激を与え、意義のあること。ただ留学生を受け入れる場合は、十分な修学条件を保証するためにインフラ環境を整備する必要がある。

佐藤（会場より）：都会に行きたいか、地方に行きたいか、決めるのは留学生。選択肢を持てるように環境を整備すべき。日本の文化を体験したいなら、地方の方が良いと思う。

堀江：関東に留学生が多いのは、特に東アジアの留学生が、都市部の方が田舎より良いと考える傾向があることと、都市部に関しては先輩からの情報が多いことによるのではないかと。留学生が少ない大学は、情報が届いていないため、もっと海外に情報発信する必要がある。

4. 日本で就職せずに卒業後に帰国する理由のひとつとして、日本語能力が問題にではないかと考えている。日本の企業に就職するには、留学生の日本語力はどれくらいのレベルが必要か？

山本：日本語の試験は、“日本語能力検定”と“BJT（ビジネス日本語能力テスト）”がある。日本語能力検定のレベルは上から、N1、N2。BJTのレベルは上から、J1、J2、J3。J3はN1とほぼ同レベルで、留学生が目指しているレベル（日常会話レベル）。しかし、一般的に企業が求めているのは、J1、J2レベル。ただ、留学生は日本語が下手なだけで能力が低いのではない。主体性やチャレンジ精神を持っている人が多いので、採用の際は日本語力のみで判断しないでほしい。

田中：最初に採用した留学生は、日本に来て半年間で日本語を覚えた。その次に中国で採用した学生は、面接の時には日本語が片言だったため、自分の意思を伝えられるまで学んでから来日してほしいと伝えた。弊社では日本語力は採用の際に重視することではない。日本語のテストで

点数が高くても、仕事ができるわけではない。

佐々木：採用した外国人社員は、N1レベルで日常会話は問題なくできる。採用するときは、日本語レベルよりも、コミュニケーションがとれるかどうかで判断した。仕事に対する姿勢や意識が非常に高いので、入社後は日本語力の伸びが大きい。

5. 経済産業省のアンケート調査によると、留学生の8割が日本に住むことに魅力と感じている一方、日本で働くことに魅力を感じている人は2割に留まっている。その理由は？

田中：仕事に対し、留学生は明確なビジョンを持っているが、日本の企業（特に中小企業）は不明確なところが多いため、留学生にとって働く意義が感じられないのだと思う。

山本：留学生の多くは母国との橋渡しになるような国際関係の仕事をしたいと考えているが、そのような仕事に就けるのは、実際に日本で就職した留学生の約3割。希望と現実のギャップがあるからだと思う。

佐々木：日本で働いている留学生の日本企業に対する評判が良くないためだと思う。日本企業のネガティブなイメージは、残業。早く帰れたとしても他の人が帰るまで帰れないというイメージを持っている。

6. 日本人学生は大企業志向だが、留学生には大企業志向があるのか？また、優秀な人材獲得が難しい中、中小企業は優秀な留学生を獲得していく必要があるのではないか？

山本：大企業志向は、留学生の方が強いように感じる。わざわざ日本に来たので、母国でも知っている企業に就職したいと考えている。留学生の企業見学会希望先アンケートでは、アップル、グーグル、ソニーなどが書かれている。ただ大企業に就職するのは、日本で就職希望の留学生のうちのたった1割。その他は中小企業に就職している。そのため、留学生採用は、中小企業にとっては優秀な人材を獲得するチャンス。

7. 学部課程の留学生は、日本での就職が約3割、母国での就職が約8%。一方、博士課程の留学生は、日本での就職が18%、母国での就職が約3割なのはなぜか？（表5-3）

山本：学部課程の留学生は日本での生活も長く、日本の文化や考え方に馴染んでいる人が多いため、日本での就職が多い。博士課程の留学生は、研究目的で来日したり、英語で授業を受けたりするため、帰国することが多い。

堀江：博士課程の留学生は、帰国を前提に母国の奨学金で留学している人が多い。

表5-3 山本氏資料より

外国人留学生の進路状況				博士課程			
大学（学部）				博士課程			
進路状況	人数	比率	比率計	進路状況	人数	比率	比率計
日本国内【就職】	3,896	29.7%		日本国内【就職】	512	18.2%	
出身国（地域）【就職】	1,091	8.3%	38.2%	出身国（地域）【就職】	843	29.9%	49.7%
他国【就職】	22	0.2%		他国【就職】	45	1.6%	
日本国内【進学】	2,300	17.5%		日本国内【進学】	43	1.5%	
出身国（地域）【進学】	102	0.8%	19.7%	出身国（地域）【進学】	10	0.4%	2.1%
他国【進学】	177	1.3%		他国【進学】	5	0.2%	
日本国内【その他】	1,889	14.4%		日本国内【その他】	669	23.8%	
出身国（地域）【その他】	3,576	27.3%	42.2%	出身国（地域）【その他】	578	20.5%	48.2%
他国【その他】	69	0.5%		他国【その他】	110	3.9%	
合計	13,122	100.0%		合計	2,815	100.0%	

JASSO「平成25年度外国人留学生進路状況・学位授与状況調査結果」より

【まとめ】

山本：留学生を特別扱いせず、活用してほしい。

田中：外国人社員の採用時は苦労したが、異なる考え方や視点を持つことができ、事業展開や人材育成に関しては成長できたのではないかと思う。今後もいろいろな人材を受け入れていきたい。

佐々木：外国人社員やインターンシップの留学生と働いて、他の日本人の社員が刺激を受けた。日本人だから外国人だからと気にせず、一緒に働く仲間を受け入れていきたい。

堀江：留学生の日本語教育や留学生と地域との関わりをどのように作っていくかが今後の課題。今後は、外国人と一緒に働く人材として、日本人学生の育成が問われてくると思う。

参加者からの一言

従来、ローカルに事業を営む中小企業は、留学生の採用を考えもしなかったに違いありません。しかし、国による留学生誘致政策や就職支援活動の後押しもあり、また、インバウンド客への対応といった企業側のニーズもあり、日本企業に就職する留学生数が着実に増加傾向にあるといます。ただ、実際に留学生が就職したいのは、名の知れたグローバル大企業であり、インバウンド客への対応を中心に考えているローカル企業との間には、大きな認識のギャップが存在しているようです。

私は、様々な課題はあるものの、グローバル化が急激に進む現在において、この留学生の就職について、自社で真剣に取り組むことこそ、次代の企業のあり方を見い出せる重要なキーになるのではないかと考えています。よって、次年度は当社のようなローカル企業でも、留学生の採用に向けて着実に進めていきたいと考えています。

塚腰 高秀（㈱塚腰運送 代表取締役副社長／本委員会 担当幹事）

Ⅲ. 参加者の声

代表幹事から

今期の土山委員会は毎回参加するたびに外国人留学生とのワークショップに参加できたことが強く印象に残っています。そこで会った京都大学のモンゴル人留学生、立命館大学のフランス人留学生の印象が特に鮮烈です。二人とも女性でありました。堂々とした自己主張には道理があり、その学識には真理があり、実に見事なものでした。外国人留学生は明らかに京都の資産であり、それに着目した土山委員会の慧眼に敬服致します。

増田寿幸（京都信用金庫 理事長／本会 代表幹事）

委員会スタッフと委員から

実に多くの出会いと気づきをいただく「場」となりました。

留学生の多様な留学動機や日本企業に対する認識に対して、企業や行政が十分なアプローチが出来ないままミスマッチが起きていること。また、大手企業への就職や伝統工芸業種等との出会いは比較的イメージ出来ていても、一般中小企業との出会いはまだまだ厳しく、特に我々の語学力の問題は国を挙げて取り組むべき課題と感じました。そのなかで、当事業は具体的な出会いの「場」の創出として意義深く、留学生と交流を深めてゆく中で、彼らの既成概念としてのニーズを、より拡大させ、「それならばやってみたい」というウォンツにまで広げられる可能性も感じました。個人的にも留学生から様々な提案を受け、彼らの起業へのアドバイスをするなど貴重な出会いがあったことに感謝します。

木村 光博 氏（株キャリアパワー 代表取締役／本委員会 副委員長）

質の高い教育に惹かれて留学生が集積する“教育の中核拠点”を目指す方向性を考えるとき、

- ① 就業への効用：国内に留まらず広く良質な人材確保に繋がる。また留学生が持つ海外情報なども経済活動に活用できる。
- ② 帰国後の効用：日本での良い就学環境で学んだ留学生は、帰国後に母国の日本への理解・日本との交流向上、さらにアウトバウンドに資する。
- ③ 語学能力と相互理解：意思の疎通だけでなく、相互の文化理解が必要である。
- ④ 日本の立ち位置：アジアの中心、更にアジアの玄関になるための良質な人材交流に、留学生の確保は不可欠である。

以上より、留学生の就学環境を向上させるべきであると感じました。

中野 博美 氏（医啓信会 理事長／本委員会 担当幹事）

本委員会を通じて感じたことは、企業人は留学生を学生として見た時、留学生にとって日本企業は、就職採用のハードルが高いと思っています。これがお互いの誤解を生み、京都は優秀な「人財」を逃しています。留学生の皆さんは、常にキャリアアップを目指している立派な企業人でもありました。世界に挑む企業がひしめく京都が、さらにこの問題に取り組むことが、重要と考えます。これまで学生や留学生の皆さんにとって、京都は学ぶだけの地でありました。これを京都の官学産が連携して「英知が集まり、新たな創造をする地」に変えることにより、京都と日本の伝統、文化、イノベーションを支え、新たな発展をしていくと思います。最後に多くの皆様と交流させていただきましたことに、心より感謝申し上げます。

柳本 貴久 氏（㈱エール機械 代表取締役／本委員会 担当幹事）

ワークショップ等を通し、留学生や学生の生の声や悩みなどが聞け、有意義でした。

留学生は、日本文化に対して日本の学生よりも造詣が深いように思われます。また日本企業への就職希望の意思を強く感じられますが、日本文化に触れたり、就職に対しての環境が整っていないというのが現実です。そのため、まず留学生の情報源であるSNSを整備し、もっと一般市民と繋がりを持って生活文化に溶け込む必要があるのではないかと思います。

偶然にも英会話を習っていたのが、第2回委員会のパネリストのベルトツツイ氏だったり、同席した留学生達とFacebook友達になったりと今も交流があり、この委員会のご縁が今後も京都と学生のコミュニティに繋がっていくことを願っています。

熊谷 昌美（㈱熊谷次商店 代表取締役／本委員会 委員）

この委員会で留学生と接し、また個人的に大学で講演などをさせていただき日本人学生とも多く接して感じたことは、日本人学生は、京都に対する興味が薄く、京都を知らない人が多いということです。一方で留学生は、京都に興味を持っている人が多く、理解しようと努力していることを強く感じました。

留学生が最も接する機会の多い日本人学生から京都の良さを吸収しづらい状況にあることは「大学のまち・学生のまち」と呼ばれる京都において、大学が有する知的財産、人的財産の活用が難しい状況にあるのではないのでしょうか？大学・企業の活性化には産学公のさらなる連携が必要だと思いますが、京都でしか体験できないことは、伝統文化から先端技術まで多くあります。日本人学生も巻き込んで推進していくことが留学生のみならず日本人学生並びに京都企業にとっても有益であると強く感じましたので、このような取り組みをさらに進めていくことが必要と思います。

最後にこのような素晴らしい委員会を運営いただき、参加できたことを光栄に思うとともに感謝申し上げます。

山口 智啓（全日本空輸㈱ 京都支店 支店長／本委員会 委員）

オブザーバーから

まずは、当委員会を開催され留学生を含む学生と企業の方々と一堂に会して意見を交換できる場を作られ、有意義な討論に参加できる機会をいただきましたことに関しまして、心より感謝申し上げます。

京都は「学生のまち」と自負しておりますが、その学生のパワーが京都の発展に寄与してこそ意味あるものだと考えております。そのためにも学生の期間をキャリアパスの一過程として捉え、入学から卒業で終わるのではなく、幅広く就職や社会活動への道を選択でき、企業と学生がシームレスに交流する機会にあふれる街にすることが必要だと思います。

今後とも、このような取り組みが継続することを切にお願い申し上げます。

宮川 博司 氏（京都府国際課 参与）

貴会の学生と京都のコミュニティを考える委員会に参加させていただき、様々な留学生との対話を通じて、彼らが興味を持っていること、心配事など、生の声を直接、聞くことができ、毎回、非常に有意義な時間を過ごさせていただきました。

また、留学生の就職の問題では、留学生の話だけでなく、実際に留学生の雇用を促進されている企業の方々の話も聞くことができ、私達が今後、進めていくべき施策の大きなヒントをいただきました。

今後とも、委員会を通じて築いた人的ネットワークは大切にしていきたいと思っています。ありがとうございました。

橋本 浩之 氏（京都市総合企画局総合政策室
留学生支援・大学連携推進担当課長）

全国でもこれほど経済界が率先して、留学生の受入れについて研究し、理解を深めようとしている地域は他になく、日ごろ留学生の誘致・支援に携わる立場としてありがたく思うとともに、心強く感じています。

現在、東京に圧倒的に多くの留学生が来られていますが、京都には大学、経済界、行政はじめ、様々な機関が連携して、留学生の学びやすい、暮らしやすい、卒業後も働きやすい環境づくりに取り組む一体感があると思います。引き続き、本委員会の活動をはじめ、留学生の受入れに関わる関係者同士が交流して、更にチームワークが高まっていけばと思います。どうもありがとうございました。

西松 卓哉 氏（(公財)大学コンソーシアム京都 副事務局長）

IV. 参加留学生の声

BARAKAT ELSAYED Juliane Farag (ジュリアン バラカート)

プロフィール

所属大学：立命館大学 国際関係学部
グローバル・スタディーズ専攻（英語で学ぶコース）
4回生（秋入学）
出身国：UAE
出席回：第1回委員会、意見交換・懇親会



参加した感想

自分の発言に対して、経営者の方がはっきりと意見を言ってくれることが、非常に良かったです。自分と異なる意見は、とても参考になりました。経営者の方と直接お話しできる機会はあまりないので、今後機会があれば、他の留学生も誘って参加したいと思います。ただ、周りの留学生は、日本語を上手く話せない人が多いため、英語でディスカッションできればよいと思いました。

経済界へ望むこと

最初は日本で就職することは考えていませんでしたが、最近、日本で就職したいと考え始めました。同友会のディスカッションに参加し、影響を受けたことも理由のひとつです。

留学生の共通の悩みは日本での“就活”です。面接や筆記テスト(SPI)など、高い日本語レベルが必要なものは、留学生にとっては非常に難しいです。特に、英語だけで授業を受けている留学生は、日本語が上手く話せず、英語の先生など就職先が限られてしまいます。また、秋入学の留学生が4月入社 of 日本企業へ就職する場合、卒業後半年間入社できないことや、ビザ変更手続き等について心配している留学生もいます。採用に関して、留学生向けに対応してくれる企業が多くなればよいと思っています。

M. Mahdi RAOUFFARD (ラウーフ・ファード モハマド マーディ)



プロフィール

所属大学：京都大学大学院 工学研究科 建築学専攻
建築構法学講座 博士後期課程2回生
出身国：イラン
出席回：第1回委員会、第2回委員会(登壇)、第3回委員会、
第4回委員会、意見交換・懇親会

参加した感想

とても素晴らしかったです。内容は期待よりも高く、このような会に参加できて、大変よかったです。経営者の方が若い人の考え方を聞くスタイルは、日本的だと思いました。今後も興味のある留学生が参加できるような機会をつくってほしいです。将来、イランでもこのような会を開催できればと思っています。

ディスカッションのテーマについて、もっと準備(勉強)して参加すればよかったです。参加した留学生も、大切な機会であることを認識し、準備をしてから参加するほうが、もっとよい議論ができたのではないかと思います。また、ディスカッションが終われば、すぐに会場を出なけ

ればいけなかったため、参加した人と話すチャンスが少なかったことが残念でした。

経済界へ望むこと

日本企業（本社：東京都）に就職することが決まっています。大学で自分の研究ばかりしていると、様々な人との交流があまりないため、社会人になろうと思いました。日本の将来にとって“研究”は非常に大事なことだと思っています。しかし、大学では研究費が限られているので、研究の範囲を自由に広げることができません。特に工学の研究にはかなりのお金かかるので、以前より企業から大学の研究への応援（研究費等）は必要ではないかと思っています。

将来的には、イランと日本に繋がりがあある研究やビジネスなどで起業したいとも思っています。昨年、イランでは、核問題についての国際経済制裁が解除されてから、たくさんの有望なプロジェクトが実施されています。そのような中で、私は日本の企業をできるだけイランのマーケットに紹介したいと思います。今後両国間でもっと“ビジネスの交流”ができればよいと思っています。

MATEOS Lionel (マテオス リオネル)

プロフィール

所属大学：龍谷大学 国際文化学部 3年生

出身国：フランス

出席回：第1回委員会、第3回委員会、第4回委員会
意見交換・懇親会



参加した感想

留学生が、経営者と直接話ができ、意見を聞いてもらえることがよかったです。また、様々な国の留学生が参加しており、文化や考え方の異なる意見が聞けて、刺激になりました。「正しい」「正しくない」ではなく、様々な考え方を理解することは大事なことだと思います。

残念だと思ったことは、4つあります。1つ目は、ディスカッションごとの結果が、その後どうなったのかわからないこと。2つ目は、ディスカッション時間が短く、発表のために皆の意見をまとめる時間が少なかったこと。3つ目は、同友会が開催している時間は、大学が授業をしている時間帯なので、参加できない留学生も多いこと。4つ目は、他のテーブルの人と話す機会が少ないことです。ディスカッションが終わった後に、他の参加者とも話せる時間があればよかったです。

経済界へ望むこと

日本で就職し、日本に住みたいと思っている留学生は少なくありません。日本は安全で、ビジネス的にチャンスもあり、住みやすい国です。しかし、留学生に対する就職先が少なく、結局は帰国してしまいます。

同友会のディスカッションに参加した留学生は、「日本のことが好き」「日本に就職したい」人が多いので、インターンシップや就職支援などのチャンスをつくってもらいたいと思います。お互いに協力し、皆の利益になるはずで。

STANLEY WENUR (スタンリー ウィナー)



プロフィール

所属学校：京進ランゲージアカデミー京都中央校
出身国：インドネシア
出席回：第4回委員会

参加した感想

来日前は、シンガポールの大学で観光を学んでいました。将来は、日本の大学院で学び、日本の企業に就職したいと考えています。ディスカッションは、“観光戦略”のテーマも興味はありましたが、日本企業への就職のことが一番知りたかったので、“多様な働き方”のテーマに参加しました。ディスカッションはよかったです。留学生の就職問題に対しての解決策がなかったため、解決に向け話し合う時間がもう少し長ければよかったですと思いました。しかし、わからないことが質問でき、日本の就職について少し理解できたと思います。

賈子奇 (ジャズチ)

プロフィール

所属学校：京進ランゲージアカデミー京都中央校
出身国：中国
出席回：第4回委員会



参加した感想

日本企業への就職は、私たち留学生にとって関心があるテーマです。ディスカッションでは、テーマに対する解決策はみつきりませんでした。とてもよい勉強になりました。また経営者の方々が親切に話をしてくれたので、雰囲気もよく、話やすかったです。私は、中国の大学で電子工学を学んだ後、来日しました。来年から日本の専門学校でロボットなどの機械工学について学ぶ予定です。将来は日本企業に就職したいと思っていますが、年齢や日本語能力の面で就職できるかどうか心配しています。日本企業はどのような点を重視して留学生を採用するのか、職場はどのような雰囲気なのか等、わからないことが多く、もっと知りたいと思いました。またこのような機会があれば、参加したいと思います。

※学校名・学年については、平成29年1月時点のものを掲載

《参考資料1》

平成27～28年度 学生と京都のコミュニティを考える委員会 活動状況

※会社名・役職名については、開催時のものを掲載（敬称略）

平成27年度

- 7月24日(金) **第1回スタッフ会議** 7名出席 同友会事務局
- 8月26日(水) **第2回スタッフ会議** 7名出席 同友会事務局
- 10月28日(水) **第3回スタッフ会議** 8名出席 同友会事務局
- 11月6日(金) **第1回委員会(オープン委員会)** 94名出席(うち会員42名) 京都東急ホテル
 1. 委員会の概要説明
 2. 講演
 「学生と考える、新しいインバウンドビジネス」
 京都大学経営管理大学院 特定准教授 前川佳一
 3. グループディスカッション
- 12月2日(水) **第4回スタッフ会議** 7名出席(うち会員6名) 同友会事務局
- 12月2日(水) **留学生との意見交換・懇親会** 15名出席(うち会員6名) o・mo・ya東洞院
- 2月19日(金) **第2回委員会** 36名出席(うち会員24名) 京都東急ホテル
 パネルディスカッション
 「ここが聞きたい留学生の本音！ —— YOUは何しに“ KYOTO ”へ？」
 パネリスト: シカゴ大学3回生 ニコール ベルトツツイ、同志社大学3回生 林均蔚、京都府立大学4回生 山下美早貴、京都大学大学院 博士後期課程1回生 ラウーフ・ファード モハマド マーディ、京都大学大学院 博士後期課程2回生 マイケル ライアン スミス
 コーディネーター: 京都府立大学 公共政策学部講師 杉岡秀紀
- 3月8日(火) **第5回スタッフ会議** 9名出席(うち会員8名) 同友会事務局

平成28年度

- 5月24日(火) **第3回委員会** 58名出席(うち会員24名) 京都東急ホテル
 グループディスカッション
 「世界から学生が集まる京都にするために必要なこと」
 ファシリテーター: 京都府立大学 公共政策学部講師 杉岡秀紀
- 5月31日(火) **第6回スタッフ会議** 8名出席 同友会事務局
- 6月24日(金) **第7回スタッフ会議** 7名出席(うち会員6名) 同友会事務局
- 9月30日(金) **第4回委員会** 73名出席(うち会員28名) リーガロイヤルホテル京都
 グループディスカッション
 テーマ1「京都で学ぶ留学生のための“情報サイトの改善策”を提案する」
 テーマ2「観光立国に向け、“京都に必要な戦略”を考える」
 テーマ3「京都の企業で働くグローバル人材の活躍を知り、“多様な働き方”を考える」
- 10月12日(水) **第8回スタッフ会議** 8名出席(うち会員7名) 同友会事務局
- 12月20日(火) **第5回委員会** 33名出席(うち会員21名) 京都東急ホテル
 パネルディスカッション
 「留学生の就職と企業での活用の在り方」
 パネリスト: (株)デアライブ 取締役COO 佐々木幸太郎、京都エレベータ(株) 代表取締役 田中陽一、(株)ナジック・アイ・サポート 西日本統括本部本部長 山本桂一郎
 コーディネーター: 立命館大学国際教育推進機構 准教授 堀江未来
- 3月29日(水) **第9回スタッフ会議** 8名出席(うち会員7名) 同友会事務局

《参考資料2》

平成27～28年度 学生と京都のコミュニティを考える委員会
委員名簿

※平成29年3月31日現在（敬称略）

委員長

土山 雅之 土山印刷㈱ 代表取締役社長

副委員長

木村 光博 ㈱キャリアパワー 代表取締役

佐藤 文俊 ㈱堀場製作所 常務取締役

担当幹事

児嶋 一登 ㈱京写 代表取締役社長

塚腰 高秀 ㈱塚腰運送 代表取締役副社長

中野 博美 医啓信会 理事長

東 宗謙 ㈱太鼓センター 代表取締役社長

柳本 貴久 ㈱エール機械 代表取締役

アドバイザー

杉岡 秀紀 福知山公立大学 地域経営学部 准教授

委員

赤松 徹眞 龍谷大学 学長

荒井登志樹 ㈱ゼネック 代表取締役社長

池田 直史 日本航空㈱ 京都支店 支店長

池田 正樹 ㈱ワコールキャリアサービス
代表取締役社長

上西 正晃 ㈱大気社 京都営業所 所長

梅本 裕 学京都橘学園 理事長

大井清之助 サントリー酒類㈱ 京都支店 支店長

大垣 守弘 ㈱大垣書店 代表取締役

岡野 真之 ㈱岡野組 専務取締役

加座 教雄 ㈱近鉄・都ホテルズ ウェスティン都ホテル京都
取締役総支配人

片岡 実 京都機械工具㈱ 取締役常務執行役員

勝見 昭 丸近証券㈱ 代表取締役社長

加藤 洋一 三菱UFJモルガン・スタンレー証券㈱
京都支店 執行役員支店長

川口 聡太 ㈱ブリッジコーポレーション 代表取締役

北川 貞大 カゴヤ・ジャパン㈱ 代表取締役

北川 雅章 同志社大学 副学長

木村 正洋 ㈱京都テクニカ 専務取締役

熊谷 昌美

㈱熊谷次商店 代表取締役

小林 達生

東京海上日動火災保険㈱ 京都支店
支店長

小山 政吾

㈱山政小山園 代表取締役社長

近藤 雅彦

㈱ジェイ・エス・ビー 専務取締役

雑賀 和彦

サイガ㈱ 代表取締役

佐伯 祐左

東邦電気産業㈱ 取締役営業部長

坂上 慶一

大和電設工業㈱ 専務取締役

榎田 隆之

京都信用金庫 専務理事

佐々木茂喜

㈱エリッツホールディングス 常務取締役

佐々木喜一

成基コミュニティグループ
代表兼最高経営責任者

篠原 総一

京都学園大学 学長

菅 恭弘

京都学園大学 大学事務局長

杉本 卓也

㈱KOYO熱錬 専務取締役

杉本 豊平

アーバンホテルシステム㈱ 代表取締役社長

瀬戸川雅義

㈱アールセッション 代表取締役

高杉 政一

㈱ケービデバイス 代表取締役

高橋 英明

㈱高橋本社 代表取締役社長

武田 知也

㈱テイスト 代表取締役社長

竹中 徹男

㈱清和荘 代表取締役

立木 貞昭

㈱京進 代表取締役会長

田辺 親男

親友会グループ 会長

谷孝 大

㈱フューチャースピリッツ 代表取締役

千振 和雄

㈱学生ハウジング 代表取締役社長

津田 繁男

長津工業㈱ 代表取締役会長

中野 康孝

パナソニックエクセルスタッフ㈱
京都支店 支店長

中村 隆

㈱菊岡家 代表取締役

中村 憲夫

平安建材㈱ 代表取締役社長

中山 誠

㈱ジュピター 代表取締役社長

西 信和

㈱片岡製作所 専務取締役

西島 宏和

西善商事㈱ 常務取締役

西田 哲郎

嵯峨野観光鉄道㈱ 代表取締役社長

長谷川忠夫

㈱長谷川松寿堂 代表取締役社長

浜島 和利

日本通運㈱ 京都支店 支店長

平田 晃一

㈱平田清商店 代表取締役

藤井 一郎

㈱フジックス 代表取締役社長

船井 渉	(株)長栄 取締役管理本部長
古橋 秀敏	古橋産業(株) 代表取締役社長
本間 満	明清建設工業(株) 代表取締役副社長
前田 剛	(有)前田珈琲 代表取締役
松岡 敬	同志社大学 学長
松田 猛	アークレイ(株) 代表取締役執行役員社長
松本 誠	(株)オートアンドハウス 代表取締役社長
森島 朋三	(学)立命館 専務理事
森田純一郎	吉忠(株) 社長室長
八木 茂	(有)ワイ・イー・エス 代表取締役
山口 智啓	全日本空輸(株) 京都支店 支店長
山下 泰生	(株)堀場製作所 理事管理本部副本部長
横山 良範	キリンビール(株) 京滋支社 支社長
吉田 光一	(株)フラットエージェンシー 取締役会長
吉田 創一	(株)フラットエージェンシー 代表取締役
若山 貴義	美濃清商工(株) 代表取締役社長
豊田 博一	(一社)京都経済同友会 理事事務局長

オブザーバー

桂 良彦	(公財)大学コンソーシアム京都 事務局長
栗田 洋	(公財)大学コンソーシアム京都 副事務局長
西松 卓哉	(公財)大学コンソーシアム京都 副事務局長
藏重 暢宏	(公財)大学コンソーシアム京都 国際事業部主幹
今本壘依子	(公財)大学コンソーシアム京都 国際事業部 京都留学コーディネーター
田中 照彦	京都府 文化スポーツ部 大学政策課課長
大饗 秀和	京都府 文化スポーツ部 大学政策課副課長
宮川 博司	京都府 国際課 参与
石塚 健一	京都府 国際課 留学生政策担当課長
奥井 拓史	京都市 総合企画局総合政策室 大学政策部長
橋本 浩之	京都市 総合企画局総合政策室 留学生支援・大学連携推進担当課長
富野暉一郎	福知山公立大学 副学長
中谷 真憲	(特非)グローバル人材開発センター 事務局長

※その他、留学生、日本人学生

事務局

川口佳菜子	(一社)京都経済同友会 事務局係長
小松 麻未	(一社)京都経済同友会 事務局員

一般社団法人 京都経済同友会
学生と京都のコミュニティを考える委員会

発行 一般社団法人 京都経済同友会
京都市中京区烏丸通夷川上ル京都商工会議所ビル5階
TEL: 075-222-0881 FAX: 075-222-0883
URL: <http://www.kyodoyukai.or.jp/>